

事業所名	グループホーム本陣 (クリックすると事業者の情報にリンクします)
日付	平成 16年 12月 4 日
評価機関名	㈱東京リーガルマインド (クリックすると評価機関の情報にリンクします)
評価調査員	A: 現職 介護支援専門員 資格・経験 介護支援専門員歴3年・看護師歴37年以上 B: 現職 介護支援専門員 資格・経験 社会福祉士・介護支援専門員歴4年・看護師歴20年以上
自主評価結果を見る	(事業者の自主評価結果にリンクします)
評価項目の内容を見る	(評価項目にリンクします)
事業者のコメントを見る(改善状況のコメントがあります!)	(事業者情報のうち評価結果に対する事業者コメントにリンクします)

外部評価の結果

講評
全体を通して特に良いと思われる点など(記述)
○矢掛駅の近くにある、宿場町矢掛の町並みにマッチした古民家風の木造平屋のホームである。広いたずまいで、ウッドデッキのある中庭で本陣のシンボル木、山もみじで四季の風を感じながらおやつしたり、花作りや菜園での野菜作りも楽しめる。個室は本間7.5畳と広々として1間の押し入れがあり、冷暖房が整い障子や木の香りのする快適空間がある。近くに大仙院、美術館、矢掛本陣、スーパーなど訪れるところもある。
○入居者のこれまでの人生経験を尊重している。調理や後片付けなどの日常生活、野菜や花作りいけ花大正琴などの、昔取った杵柄で楽しく過ごせるようにごく自然な形でさりげなく誘導している。またこれといった趣味もない方などには話の聞き役に回り、安心して居られるよう配慮している。
○三食、おやつなども職員と入居者の共同の手作りとしている。特に新鮮な取れたての材料を用いた7種類の栄養バランスの配慮されたお料理には、作る楽しみがあり、それだけに美味しいものがある。
○管理者と職員は、入居者のありのままの状態を受け止め、自分が年老いたらどうして欲しいかを念頭において、人生の大先輩としての尊敬を忘れず、入居者1人1人のペースに寄り添う介護に徹底している。
○隣接の高校生ボランティア部の訪問による音楽や話し相手、職員の子供が遊びに来る、近所のボランティアの訪問が気軽にできるなど地域との交流がうまくできている。
○提携医療機関として、鳥越病院やおぐら整形外科が近くに入り入院も出来る。通院はスタッフによって支援されている。坂本歯科の往診もある。緊急の場合は矢掛病院も受け入れてくれるなど医療との連携もとれている。
○尚入居に際しては希望者に“おためし入居”をして本人がここで過ごせるかと、他の方とうまく共同生活が出来るかという視点で本人および家族の思いを聞いて確かめ入れるのでより納得が得られる。
特に改善の余地があると思われる点(記述)
○イベントを門の掲示板に展示するなど工夫も良くされていたが、強いて言えば、日頃の様子や隣接の開設者の別宅でのお茶会とか、サンドイッチでの食事会などイベントも比較的多い点などを、定期的に便りにしたためると更に良いのではないだろうか。

I 運営理念

番号	項目	できている	要改善
1	理念の具体化、実現及び共有	○	
記述項目	グループホームとしてめざしているものは何か(記述)		
	○“自分らしく安心して自由で楽しい生活”をモットーに開設者と管理者が高齢者介護の実践の中から、穏やかにゆったりと暮らせるよう、その人らしく生活できる楽しい環境づくりに積極的に取り組んでいる。		
	○開設者、管理者、職員は入居者が自立した生活を営むことができるように、危険さえなければ、制限なく、その人が暮らしてきた家庭生活の延長線上での自然な日常生活の欲求をくみ上げるよう支援している。例えば、毎朝大仙院にお参りする(車椅子の方のために段差解消が入り口にある)。入居者個人に畑を提供して、家から持ち込まれた畑道具で野菜作りを楽しむなど。		
	○管理者と職員は、やさしく寄り添う介護で入居者が安心して暮らせるよう、自分が年老いたらどうして欲しいかを念頭において相手の立場にたち、人生の大先輩としての尊敬を忘れず接している。		
	○入居者が張り切って職員と共に食事作りを分担される姿や、食事時の会話、男性も牛乳の箱を利用して椅子作りをされるなど、生き生きとした入居者の穏やかな表情から理念が実践されていると感じた。		

II 生活空間づくり

番号	項目	できている	要改善
2	家庭的な共用空間作り	○	
3	入居者一人ひとりに合わせた居室の空間づくり	○	
4	建物の外回りや空間の活用	○	
5	場所間違い等の防止策	○	
記述項目	入居者が暮らしている生活できるような場づくりとして取り組んでいるものは何か(記述)		
	○キッチン、リビング、ダイニングは床暖房になっている。居間にはピアノがあり、宴会に使いやすくキッチンが同じ側に2つある。もう一方のユニットはキッチンが廊下をはさんで2箇所があり、より家庭的な小グループに分かれて食事ができる。また畳スペースもあり、自由に横になることもできる。日頃は季節の野菜や花作りもでき、中庭には居間から直接出られるようになっていて、居間からの人の気配や声が聞こえたりして安心できる。近くの開設者の別宅でお茶会や食事会も楽しめる。		
	○起床は5時ごろから始まり、順次、食事摂取でき、晩は夕食後すぐ眠られる人まで、それぞれのペースにあわせている。朝食のみ、それぞれの起床時間に合わせる。夜眠れない方には居間でお話を聞くなど、入居者の日常生活のペースを大切に、まさに入居者に寄り添う支援がなされている。		

III ケアサービス

番号	項目	できている	要改善
6	介護計画への入居者・家族の意見の反映	○	
7	個別の記録	○	
8	確実な申し送り・情報伝達	○	
9	チームケアのための会議	○	
10	入居者一人ひとりの尊重	○	
11	職員の穏やかな態度と入居者が感情表現できる働きかけ	○	
12	入居者のペースの尊重	○	
13	入居者の自己決定や希望の表出への支援	○	
14	一人のできることへの配慮	○	
15	入居者一人ひとりに合わせた調理方法・盛り付けの工夫	○	
16	食事を楽しむことのできる支援	○	

III ケアサービス(つづき)

番号	項目	できている	要改善
17	排泄パターンに応じた個別の排泄支援	○	
18	排泄時の不安や羞恥心等への配慮	○	
19	入居者一人ひとりの入浴可否の見極めと希望にあわせた入浴支援	○	
20	プライドを大切にした整容の支援	○	
21	安眠の支援	○	
22	金銭管理と買い物の支援	○	
23	病果の人の受診に理解と配慮のある医療機関、入院受け入れ医療機関の確保	○	
24	身体機能の維持	○	
25	トラブルへの対応	○	
26	口腔内の清潔保持	○	
27	身体状態の変化や異常の早期発見・対応	○	
28	服薬の支援	○	
29	ホームに閉じこもらない生活の支援	○	
30	家族の訪問支援	○	
記述項目	一人ひとりの力と経験の尊重やプライバシー保護のため取り組んでいるものは何か(記述)		
	○調理や後片付けなどの日常生活、畑作りや、大正琴などの趣味で楽しく過ごせるように配慮している。		
	○午前のおやつにふかし芋をいただいたが、男性が「この芋は自分で作った」と近寄ってこられ、得意げにニコニコと話された。料理屋をしていた女性のキャベツ刻み、給食員をされていた方の高野豆腐の盛り付け。これらを見て、入居者の人生経験を尊重し、さりげなく作業に誘導できていることが実感できた。		
	○特にやりたいことのない方へも、その方の話の聴く役に回るなどして、ありのままを支えることで、取り残されることなく安定して居られるよう配慮している。		
	○職員の誰もがプライバシーの保護を遵守事項としており、ボランティアなどが入られて写真を振られる場合など、後ろ姿のみとしている。また入浴時は洗濯と背中流しのみ介助し、他は本人にまかせ、トイレ使用時なども、必要以外の介入をしないよう入居者のプライドを大切にしている。入浴時に気づかれないよう職員が排泄の始末をしているのには頭が下がると感じる。		

IV 運営体制

番号	項目	できている	要改善
31	責任者の協働と職員の意見の反映	○	
32	家族の意見や要望を引き出す働きかけ	○	
33	家族への日常の様子に関する情報提供	○	
34	地域との連携と交流促進	○	
35	ホーム機能の地域への還元	○	
記述項目	サービスの質の向上に向け日頃から、また、問題発生を契機として、努力しているものは何か(記述)		
	○現在のところ2ユニット間の職員の交代はせず、入居者と職員の馴染みの関係を大切に、信頼関係を築くようにしている。また同一の施設にあるデイサービスの職員と入居者が互いに交流、および職員個々の気づきを大切にして、介護サービスの質の向上につなげている。		
	○開設者、管理者、職員が協力して畑作り、散歩、買い物、お参り、お茶会、お食事会、うどん食べ会等外に出て楽しめるような環境作りをしている。		
	○就職者には職員教育マニュアルがある。研修を受け、介護保険のICFの講習に沿った考えを取り入れて介護計画が立てられていた。将来介護福祉士を目指す高校生のボランティアを兼ねた研修も受け入れており、今後とも必要な研修を受け、全職員への伝達・報告などの自己研鑽を重ねる姿勢が見られた。		
	○地域ケア会議が2ヶ月に1回あり、在宅介護支援センター、タクシー業界との話し合いも行っている。隣接の高校生ボランティア部の訪問を受ける、近所の方の訪問が気軽にできるなど地域との交流を深めている。		
	○管理者が中心になり、問題発生を契機として原因の理解や対応方法を共有している。例えば転倒した場合転倒前後の一連の状況を把握し、骨折がないかまず全身を確認するとか緊急時の処理マニュアルを洗い出し、再発防止に向けた対応策を職員全員で検討している。		